
クルトウース断章

高田 玄武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クルトウース断章

【Nコード】

N8325C

【作者名】

高田 玄武

【あらすじ】

ある朝、酷く悪い夢を見て目を覚ますと男は記憶を全て失っていた。自分の名前さえ思い出せない男は、一つだけ、自分が何かを探していることを本能で思い出す。ポケットの中にただ一枚の紙切れ。手掛かりはそれだけだ。貴方は、何の為に生まれ、誰の為に死にますか？

第一幕 暗闇

- 1 -

・・・浅い眠りは嫌いではない。

薄い暗闇の淵に身を寄せている間は、心を落ち着かせていられる。ほんの一時の安らぎ。現実と非現実の狭間に身を委ねられる瞬間。しかし、やがて暗闇は深くなる。宙に浮く、むしろそれは地に堕ちゆく感覚。

全身の力は思うように入らず、脱力した軀と四肢は抛を求め、何かに取り憑かれたかの如く、必死であぐ。

永久に続くかと思うほどの暗闇。それは恐ろしいほどの静寂か、雑音が、虚無、いや、その全てであろうか。

ひたすらに堕ちゆきながら、尚も果ては在らず。

やがて、暗闇は一つに、雑音は言の葉に、虚無はその姿を留めながら絶望へと変える。

「死ね！」

言の葉は酷く乱雑にまとまり、精神を一瞬湾曲させる。

死ね、と。死にたいはずはない。だからこそ、永久の暗闇の中を堕ちながらも、救いの手を求めてあがいている。なのに、死ねと？

「死ね！死んでしまえ！お前なんて要らない！死ね！死ね！」

暗闇に響く声。正しくは声ですら、いや音ですらない。それは、精神へと直接注ぎ込まれる言の葉。

力の入らない両の腕を、更に捻らせ、尚も救いを求める。

「お前など産まれてこなければよかったんだ！」

乱雑に紡がれるその言の葉はやがて、救いを求める行為を諦めへと促す。

ああ、もういい。それならば、いつそのこと殺してくれ。

「死ね！死んでしまえ！」

諦めたにも関わらず、何度も繰り返されるそれ。

死ね　　殺してくれ

死んでしまえ　　これ以上苦しませるな

産まれてこなければ　　早く楽にしてくれ

第二幕 目覚め

- 2 -

「　　っ!」

・・・酷い吐気と眩暈、嫌悪感で俺は目を覚ました。

陰鬱な空気を肺一杯に吸い込み、呼吸を整えようとするが、左胸の辺りで碎け散りそうなほどのたうつ臓器の音は、一向に止む気配はない。

全身からは大量の汗が吹き出し、背中にまとわりつくシャツが更に不快感を増幅させる。

ようやくなんとか落ち着いてきた躰を、シーツの淀んだベッドから起こすと、俺は鏡を覗き込んだ。

・・・誰だ、これは？

鏡に映ったのは、青白い肌に、充血した眼を大きく見開いた、知らない男の顔だった。

頬に手を当ててみる。形、体温、感触。

どれをとっても、脳裏の片隅にすら存在しない。伸ばし放題の頭髪を軽く引っ張ってみた。

・・・本物だ。特殊メイクでもなければ、マスクを被っているわけでもない。

この男は何者だ？

ここは一体どこなんだ？

俺は昨夜何をしていた？

いくつかの自問自答を繰り返していくうち、最も大きな難問が在ることに気付いた。

そもそも、俺は一体何者なのか？

俺はなぜこんな処に居るんだ？

思い出そうとすればするほど、疑問は更に疑問を生む。

つまりは、何も思い出せないのだ。

自分の名前、住所、年齢、職業、家族・・・記憶の糸をひたすらにたぐり寄せてみるが、そこには何も無い。思い出すどころか、存在していないのである。

それでも、鏡に映る男の顔が、本来の自分の顔ではないことだけははっきりと解った。違和感、というべきであろうか。確かにこの顔は自分のモノではない、ということだけは鮮明に理解した。とはいえ記憶がないのだから、本能の指示以外の何者でも無いのではあるが。

俺は考える。

記憶を辿るのは諦めた。

これ以上思い出そうとしても時間の無駄だと気付いたからだ。元々存在し得ぬモノを思い出すことなど不可能だ。まずは現実を直視しろ。その上で最善だと思う行動を取れ。

そう考え、俺はベッドから起き上がり、両の腕と脚を動かしてみる。

・・・身に違和感はない。先程まで眠っていたせいか、少々ふらつきはしたが、何処にも異常はない。記憶を失っているならば、身体に外的な衝撃を受けたのやも知れぬと考えたが、それも要らない心配だったようだ。

それならばと、部屋の中を見渡す。部屋はワンルームで、周りには先程まで使っていたベッド、その横には鏡を置いてあるそれほど大

きくない引き出し付きのキャビン、そしてカーテンの閉まった四角い窓の横に、黒いコートの掛っている簡易型の上着掛けがあるだけだ。

至ってシンプル。飾りっ気もないが、散らかっている様子もない。生活の匂いが全くしないのだ。

ということは、この部屋は休息の為にだけに使っている、或いは引越して間もないか、などが推察されるのだが……。しかし後者であればまだ開かれていない引越しの荷物の詰まった箱が一つ二つ在ってもいいようなものだが、そんなモノは一つもない。さもなくば、この部屋の持ち主は、生来、モノを持つことを極端に嫌っていたか……。

だが、生活をするとなれば、最低限の日用品くらいは必要になる。しかし、この部屋にはその必要最低限の物資、カップや冷蔵庫すら存在しない。となると、前者、つまり、休息の為にだけにこの部屋を使っていた可能性が極めて高い。何より、つい今しがたまで実際にそのベッドで休眠をとっていた自分が居たことがそれを裏付ける。

しかもこの部屋の尋常でないモノの少なさから察するに、部屋の持ち主　つまり自分は、いつでも部屋を空けられる準備でもしていたのだろう。何故だ？単身で各地を渡り歩くような仕事でもしていたのだろうか。もしくは、何かに追われるような　。

第三幕 疑心暗鬼

- 3 -

嫌な感覚が脳裏と背中を冷やす。

追われている？俺が？

だとしたら、此処で居るのは危険だ。とはいえ、それならば他に何処で居ようが、安全な場所など思い付かないが。

思考と現状を照らし合わせて、今どうすることが得策かを必死で思案する。

落ち着け。追われているにしても、何も今すぐに逃げる必要はない。この部屋が身を隠す為の籠城ならば、少なくとも今はその役目を果たせているのだろう。俺はカーテンを開いて外を見る。目の前に現れたのは壁。他の建物の壁面だろう。真下を覗き込むと、そこは狭い路地。どうやら、界限からは離れた場所らしい。辺りには人の気配はない。少なくとも、此処からは人影を確認することは出来なかった。

俺は少しだけ胸を撫で下ろし、次にすべき行動を考える。

そうだ、持ち物だ。

今俺が身につけているものは、素肌に胸ポケット付きの灰色の開襟シャツ、それに紺色のジーンズのみ。俺はジーンズのポケットを漁る。

ポケットからまず出てきたのは、それほど大きくはない銀色の懐中時計。それから、黒ずんだ銀色のオイルライター。よく使い込まれている。着火石は刷り減っていない。着火ドラムを回すと、シュボット音を立てて芯材に引火する。・・・オイルも十分に補充されているようだ。

シャツの胸ポケットを探ると、白地に紅いマークの入った紙の包装に、数本残った、少し折れ曲がったフィルター付きの煙草を見つけた。どうやら、この駄の持ち主は愛煙家だったらしい。俺は折れ曲がった煙草を指で整え、唇に挟みフィルターを噛むと、息を強く吸いながら煙草に火を点ける。紫煙が辺りに立ち込めると同時に、芳ばしい煙が肺の中を侵食してゆく。

強かに紫煙を吸い上げると、肺に溜りきらなくなったそれを一気に吐き出す。

・・・頭が、心地好い痺れとともに冷めわたる。駄中の血液が、落ち着きを取り戻してゆく。

俺は、一通り煙を吸い終えると、更にジーンズのポケットを探る。次に出てきたのは、紙切れ。くしゃくしゃになっていてそれを広げて、しわを直すと、掌くらいの大きさになる。紙には黒インクで、文字が書かれている。

『27番街 テスタロッサ 18時』

なんだ？番地と・・・テスタロッサ？店の名か何か？時間まで記入しているということは、誰かと待ち合わせでもしているのだろうか。

俺は懐中時計を見る。時刻は、15時を指した辺り。

「三時間・・・か。」

誰にともなくそう呟く。この紙切れに書かれているのが誰かとの待ち合わせだとして、それが今日であるという保証はどこにも無い。もしかしたらすでに片付いた約束なのかもしれないし、明日、いや、一週間後の今日以降である可能性もある。

それでも何かの手掛りにはなるかもしれない。どちらにしても、この部屋にずっと居続けるわけにもいかないのだ。

大分長く延びた煙草の灰を鏡の横の空き缶に落とすと、コートの掛った上着掛けがある窓際に近付く。この部屋からは、外が暑いのか寒いのかすらも分からなかったが、薄出のシャツ一枚で外に出るには心もとない。少なくとも、この時間にこの気温ならば、真夏だというわけではないだろう。

俺はコートに手を掛ける。上着掛けからコートを解放した瞬間、ゴトットという重い音と共に、何かが床に落ちた。

なんだ？

床に落ちた重量感のあるソレを拾おうと手を伸ばした。

っ！？

そこにあっただのは、落とした音よりも更に重々しく、黒く光る、鉄の塊。

第四幕 鉄の塊

- 4 -

床に転がった、重々しい鉄の塊を見て、愕然とする。

別にそれ 拳銃自体が珍しかったわけではない。

俺はその存在を知っていたし、この世界が、元の自分の知っている世界なのであれば、この黒い凶器を日常的に見ることもあったからだ。

しかし、何よりその殺傷能力のある凶器が、自分のものである部屋に存在していたことだった。

つまりは、コイツが必要な何か、護身用か、それとも本来の目的である殺傷用かは知らないが、少なくとも、コレを携帯することが必要な状況にある、という事に驚愕したのだ。

生活臭の薄い、何も無い部屋。

足元に転がる、冷たい、黒く光る凶器。

パズルが一つ、組み上がった。その時、存在すらしていなかった記憶がうつすらと極断片的にはあるが蘇った。

俺はこの凶器を知っている。もちろん、コイツの扱い方も熟知している。そして、俺は誰かに追われているわけではない。逆に、何かを追い続けているのだ。

ソレが何かは分からない。ただ、俺は確かに何かを探して、追いつけている。人なのか、物体なのかすら定かではないが、何かを追い続けている。

確信したのだ。

危険があることに違いはない。こんな物騒なものが必要な程である。だが、俺はその探し物を必ず見つけなくてはならない。俺の中にある、未だはつきりしない記憶が、確かにそう告げている。

俺は、足元に転がったそいつを拾い上げた。

掌にずしりと重くのしかかる重量感。 スライドを確認して、マガジンを抜く。弾丸は込められていない。辺りを見回して、それらしき場所を探す。ベッドの横のキャビンの引き出しを開ける。

あつた。

紅い箱。スライドさせると中にはきつちりと詰まった、小型拳銃用の弾丸。 8ミリパラペラム弾だ。弾を一個ずつ引き抜くと、ソレをマガジンに込める。12発。全弾を込め終わると、マガジンをグリップ下から銃身へと戻す。暴発防止用の安全装置のスイッチをスライドさせ、腰に留めたベルト型のホルダーに収納し、背中の方へ回す。

よし。これで大丈夫だ。

弾丸の詰まった紅い箱を元のキャビンへと戻す。俺はコートを羽織ると、ポケットの中を探る。出てきたのは、部屋のカギらしきものと、いくらかのコインと、紙幣。これだけあれば、しばらくは大丈夫だ。何より、通貨が俺の知っているものと同じだったことに安心した。少なくとも、俺の記憶にかすかに残っている生活の断片と、それほど変わらないことだけは確だと確認できたからだ。

俺は、再度胸のポケットから曲がった煙草を取り出し、火をつける。そして、考える。

メモに殴り書きされた約束の時間と思わしき時刻は六時。ちょうど今の時刻が四時。地理的な感覚はないが、書かれているのが番地名と店らしき名前だけなのからすれば、そう遠くはないはずだ。車のカギらしきものが見当たらないことから、徒歩、或いは地下鉄か何かで行ける距離なのだろう。

しかし、逆に番地名までメモに残すということは、初めて行く場所なのかもしれない。これが俺の字であるのなら、だが。

まずは、地理を把握しなければならない。ここが何処で、なんという地名なのか。番地名、それから、目的の場所は近いのか。

兎に角、外へ出る。扉を開けたが、上下へ続く階段があるだけだ。

他には何もない。壁も廊下もアスファルト造りで、階段を降りる靴の足音が周囲に響く。フロアを二つほど降りると、そこは路地。先程部屋から見下ろした路地裏だろう。人二人が通るのに肩がぶつかりそうなほど狭い。

俺はカーテンの掛った自分の部屋を見上げる。五階建ての建物は、周囲の背の高い建物の壁に囲まれている。間から覗く空は、どんよりと曇っている。部屋を出る時には気にならなかったが、少々肌寒い。

煙草を地面に押し付けて完全に火を消し、吸い殻をコートのポケットに入れる。まずは、辺りの検索だ。詳しい手掛りを求めて、俺は街のほうへ脚を伸ばした。

第五幕 遭遇

- 5 -

手掛りは、存外すぐに見付かった。

路地裏を抜けたすぐそこはメインストリートで、丁度夕飯の準備や、帰宅を急ぐ人々の群れで賑わいでいた。路上に立っている案山子のような案内標識に書かれた文字。

『サウスロタ タウン 25 ストリート』

つまり、この通りは、サウスロタという街の25番街だということになる。

目的の住所は、27番街。もし同じ街なら、そう遠くはない。三十分くらい歩けば着くだろうか。

そんなことを考えながら、人ごみの中、標識を頼りに、目的の27番街へと歩みを進めた。

人混みを縫いながら、歩くこと一時間。思ったより時間は掛ってしまったが、27番街の立て札を見つけた。大丈夫だ、まだ時間はあ

る。
俺は、「テストロッサ」を探す。街の様子は、先程の25番街と比べると全くの別物だった。壊れかかった看板。淀んだ空気は、煙臭い。陽は沈みかけ、辺りは大分薄暗くなり、水銀灯の灯りがゆつくりと滲む。

街、というよりは下町と言ったほうが正しいか。先程の25番街とは対極の、薄暗い街。よくよく辺りを伺うと、路地のあちこちから微かに人の気配がする。

見られている？

いや、違う。確かに微かな殺気のようなものは感じるが、それは俺に向けられたモノではない。というより、街中に殺気のような、怨恨のような、黒くて気持ちの悪いモノが渦巻いている。余り、ガラの良い地域じゃない。

早々に店を探そう。余計な面倒に巻き込まれる前に。そう思った矢先である。俺の耳に怒鳴り声が響く。

「待ちやがれデメエっつっ!!!!」

ガラの悪い男の声。声は後ろのほうからだ。声に追われて、何かが駆け抜けてくる。

「っ!!」

逃亡者は、意外にも小さかった。紺色の帽子にジーンズ姿。

「わ、わわっ!!」

小さな逃亡者と、目が合った瞬間、肩に衝撃が走る。

「っ!!」

小さな逃亡者が、俺の肩にぶつかって派手に転んだのだ。

「・・・あいたたた・・・」

小さな体。・・・まだ子供じゃないか？深く帽子を被っているせいで顔は良く見えないが、少年のようだ。しかし姿を詳しく確認するよりも早く、後ろから追い掛けてきていた乱暴な言葉の主の声がすぐ近くで俺の背中ごしに少年を揺する。

「はあはあ・・・やつと追いついたぞクソガキっ!!」

・・・どうやら、想像以上に穏やかではない。一体何をやらかしたんだ・・・。

「あ・・・っ!」

少年が、俺の陰に隠れる。・・・嫌な予感がする。

「なんだテメエは?」

「このガキの知り合いか?」

・・・思った通り、面倒なことになった。相手は二人。体格の良いスキンヘッドの男と、細身のリーゼント。どちらも、普通なら関わりあいにならないほうが良さそうな連中だ。

「・・・。」

少年を見る。俺を見上げて不安そうな顔をしている。・・・やはり面倒なことになった。

「おい!なんとか言えよ兄ちゃんよお!!」

「スカしやがって!テメエも痛い目に会いてえかつ!?」

・・・ボキャブラリーの低い言葉。この程度の連中ならばそれほど面倒くさくてもなさそうだ。だが、俺には、やることがある。・・・どうするか・・・?

「んだテメエっ！関係ねえならすっこんでろっ！！」

スキンヘッドの男が、俺の肩を掴む。その瞬間、俺は反射的に動いていた。

「　　っうおっっ！？」

二、三メートル向こうへ吹っ飛ぶスキンヘッド。肩を掴まれた俺はとっさにスキンヘッドの脚を払い、腕を絡めて投げ飛ばしていた。どうやら、この体に染み付いている癖らしい。

・・・やってしまった。

リーゼントはとっさのことで、面食らって呆けている。仕方ない、この場はどうにかするしかない。

「・・・来い。」

俺は、隣で同じように面食らっている少年の腕を掴んで走り出す。

「え・・・あっ！！？」

走る、走る。

「ま・・・待てこの野郎っ！！」

正氣に戻ったリーゼントが背中では吠える。が、無視だ。待てと言われて待つ奴はこの状況じゃ考えられない。

走る、走る、走る。

いくつか路地を曲がり、オンボロの看板を通りすぎたところでようやく止まる。男たちが追い掛けてくる気配はない。どうやら振り払ったようだ。

「・・・っ・・・はあっはあっ・・・」

右手のほうで、息を切らした少年が中腰になっている。こいつのせいで、時間をくっちゃまった・・・。今、何時だ？

俺はポケットから懐中時計を取り出す。

・・・17時50分。・・・やばい、ぎりぎりじゃないか。
急がないと・・・ん？

「あ・・・あの・・・。」

少年が、俺の顔を見上げて不安そうな顔をしている。

「なんだ？もうあのチンピラは撒いたぞ。」

「い、いえ・・・その、う、腕を・・・。」

・・・いかん、腕を掴んだままだった。

「すまん。・・・痛かったか？」

俺は少年の腕を離すと、コートのポケットから煙草を取り出して火を点ける。落ちて着いている場合ではないが。

「いえ、だ、大丈夫です・・・その・・・あ・・・ありがとうございましたっ！」

俺に向かってペコリと頭を下げる。

「・・・どうでもいいが、俺は探し物をしている。もしかた見つかった相手はできんぞ。」

「探し物・・・？えと、何を探してるんですか？」

少年が、小首を傾げる。

「・・・テストロッサ。」

簡潔に答える。

「テストロッサ・・・？お店の名前か何か・・・でしょうか？」

まあ、こんな子供が知っているとは思えない。まして、チンピラに追い掛けられるような少年だ。

「・・・いや、気にするな。そういうわけで俺は急いでいる。待ち合わせなんだ。」

「あ・・・でも・・・。」

立ち去ろうとした俺を引き留める。

「なんだ？知っているのか？」

「いえ、そうじゃないんですけど・・・。」

少年は、おどおどと指差す。

「
・
・
・
ん
?」

第六幕 テスタロッサ

- 6 -

ボロボロの看板。錆び付いた金具で止められたソレに書かれていた文字は

テスタロッサ
TESTAROSSA

ここが・・・テストロッサ・・・。
怪しい。怪しすぎる。バーでもなければ喫茶店でもない。それどころか、開いているのかさえも疑ってしまうほどの寂れた雰囲気。ランプの灯りすら見えない。

「あの・・・探してるのって、ここじゃないんですか？」

少年が俺に問う。

「ああ・・・そうだな、多分ここだ。」

俺の眼は店を見据えたまま動かない。煙草の煙が辺りに立ち込める時刻は、17時55分。もしも誰かとの待ち合わせの時刻ならば、もうすでに相手が居てもおかしくはない。しかし、建物の中には光らしきものは一つも見えず、誰かが居る気配もない。

俺は、躊躇する。本当にここに手掛かりがあるのだろうか。俺の探している何かか、それともこの身体の主が探している何か・・・。
だが、考えている暇はない。他に行く宛もない。手掛かりは、ポケットの紙切れ一枚のみ。

俺は、意を決して中に入ることにした。古ぼけた扉に向かって一歩

進む。

と、その時だった。

「出てきやがれクソガキいっつっ！！！」

先ほどのチンピラだ。トドメを刺さなかったのが悪かったのだろう。この声の主はスキンヘッドのほうだ。恥をかかされたのがよほど頭にきたらしい。声からすると、顔を真っ赤にして怒り狂ってでもいるんだろう。あの手の連中は中途半端にあしらうと更に面倒なことになる。・・・解ってはいたのだが・・・。

「っ！」

少年が息を飲んで、こちらを見る。・・・仕方ない、このまま放っておくわけにもいくまい。

「・・・中に入るぞ。」

俺は再度少年の手首を掴んで、テストロッサの扉を開ける。

・・・中は、真っ暗だった。扉を閉める。一瞬、暗闇の中に沈んだかのようにだった。外からは何も聞こえてこない。ただ、そこには暗闇が広がっているだけだ。

奥のほうで何かが光る。

・・・なんだ？

それはぼんやりと、しかし眼が慣れてくるにつれ、はっきりとした形に広がる。
蠟燭の灯り？

灯りに向かって、歩く。段々近づいてくる。

それは、テーブルだった。

テーブルには、灯りの点いた蝋燭が二本と、三脚の椅子。まるでそこに座れと言っているかのように、ただ蝋燭の光が煌煌と灯っている。辺りを見回すが、そこには何も無い。・・・そう、何も無いのだ。オブジェや絵画、それこそ壁すら無い様に見える。

「・・・いらつしゃい、良く来てくれたね、お客人。」

突然、どこからともなく声が響く。澄んだ声。少年か、少女か。ただ、その声はなんとも言えず澄んでいた。まるで、こちらの全てをどこまでも見透かすかのような、そんな鈴のような声。

俺は声の主を探して辺りを見回す。・・・どこだ？どこから・・・。

「どうしたんだい？・・・ああそうか、君たちには僕の姿が見えないようだ。来客は久方ぶりだね、つつい勝負を忘れてしまつ。・・・ここだ、ここだよ。」

声の主は、俺の目の前 テーブルを挟んで、向かいの椅子に腰を掛けていた。

第七幕 疑惑

- 7 -

目の前に座っていたのは、美しく光る紅い髪の少年。何もかもを見透かすような碧色の瞳が、にこやかにこちらを見ている。

「改めて、挨拶しよう。僕はアトウラ。初めまして、になるのかな。」

物腰は穏やかだ。しかし、その碧の瞳の光が、何故だか俺をイラつかせる。

「・・・挨拶など要らん。そんなことより・・・貴様は俺のことを知っているのか？何者だ、貴様は・・・っ！」

妙に苛立たしくて、少し口調が荒くなる。

「“知っている”？・・・そうだね、君達の言葉を借りて言うのなら、僕は君のことをとても良く”知っている”よ。君に記憶が無いことや、今のその躰の主が何者なのか・・・まで、全部ね。」

アトウラと名乗った少年は表情を崩さず、やはりにこやかにそう告げる。

自らの素性を知る者。自分ですら、曖昧な記憶を頼りにここまで来たというのに。

「　　だったら教えろ！！俺は何者だ！？何故俺には記憶がない！？一体俺は何を探している！？」

苛立ちを隠すこともせず、俺はアトウラに問い詰める。

「・・・君達の悪い癖だ。一度に答えられるのは一つだけだよ。とりあえず落ち着いて。ほら、後ろの子も脅えてる。何か飲むかい？ そちらはジュースのほうがいいかな？ とにかく席にどうぞ。」

悪びれもせず、アトウラは俺たちに席を奨める。・・・焦っても仕方ないが、何故だか気持ちが高ぶる。それはこいつの態度のせいなのか、それとも自分自身の不安から来るものか・・・。

「そうだ、良いハーブティーが手に入っただよ。二人ともそれでいいよね？ 嬉しいなあ、誰かとお茶を喫むのも久方ぶりなんだ。」

こっちの気を知ってか知らずか、あくまでマイペースに事を運ぶこの不思議な少年に、俺は半分呆れていた。

こうなったら、興奮しても始まらない。とにかく俺の記憶の手掛りを持っているのは現状ではこいつだけなのだ。俺は向かって右側の席に腰掛ける。後ろの少年もおずおずと席に着く。

「・・・賢明だね。どうやら、ただの熱血漢というわけじゃなさそうだ。ちょうど良いよ、このジャスミンティーには心の高揚を抑える効果もあるんだ。」

自らティーポットに煎れたハーブティーを、カップに注ぐ。そして俺と少年の前に差し出す。

「・・・御託はいい。それより、知っていることを全て話せ。それからだ。」

尚も問い掛ける俺に、若干呆れたような素振りを見せる。

「やれやれ、君はせっかちなねえ。・・・じゃ、何から話そうかな？」

やっと核心に入るらしい。・・・このアトウラという少年と話しているとペースが乱れるな・・・。

「まず一つ目だ。俺は何者だ？この躰は誰のものだ？」

「ほら、質問は一度に一つだって言ってるのに。・・・ま、仕方ないか。君達はみんなそうだしね。じゃあ答えよう。君は『始まりの子』。その躰は、ある不幸な死を遂げた男の躰さ。」

「『始まりの子』・・・？どういうことだ？この躰の主は死んでいる・・・？」

「ああ、ごめんごめん、解りづらかったかな？簡単に言っと・・・君の元の躰はすでにこの世界には無い。同じように、その躰の主の場合、君達が『魂』と呼ぶもの・・・中身だけがこの世界から消えてしまったんだ。」

「つまり・・・中身のない器に、俺という中身・・・魂が入り込んだってわけか？」

馬鹿げた話ではあるが、現状を考えると、夢やおとぎ話の世界の話だとも言ってられない。もしそうなら、俺がこの躰に違和感を感じたのにも納得がゆく。

「そうそう、そういうこと。話が早くて助かるよ。すぐには信じな

いと思っただけだ。」

アトウラが軽く拍手をしながら微笑む。

「始まりの子とはなんだ？俺の魂は何故この男の躰に入り込んだ？」

「やれやれ・・・君が幾ら質問しても答えられるのは一つずつだよ。まずは、『始まりの子』・・・そうだね、君は転生・・・生まれ変わりの言葉は知っているよね？」

「生まれ変わり・・・キリスト教で言うところの、神の再来というやつか。この世の終わりに、イエス＝キリストは人の姿を模して、世界に降臨する・・・メシア（救世主）論だな。」

「博学だねえ。そう、救世主。遙か昔・・・神に生命を賜った始まりの子、アダムは、自ら禁じられた果実を手にし、忌まわしい捕われの肉の躰に堕ちた・・・これは旧約聖書だね。でも、これはちよつと違う。長い長い時を経て、人が造り出したとても良く出来たお話さ。君達は何かにつけて『理由』を欲しがるように造られたよ。うだからね。生きることにも、死ぬことにすら理由を求める・・・。だけど、たった百年程度しか生きられない人間にしては、よく『記憶』を伝えてこれたと感心するけれど。」

アトウラは肩をすくめると、更に続ける。

「でも、伝承や宗教なんてのは全部、『理由』を欲しがった人間たちが都合のいいように解釈したお話に過ぎない。・・・君達が『神』と呼ぶ存在が生み出したのは、一握りの『魂』。正確には、肉体は、この一握りの魂を入れる器に過ぎなくて、生み出されたのは、魂と

名のつく記憶母体だけ。それを地球という環境で活かす為には、肉体という器が必要だったからついでに造ったのさ。魂に保存する記憶の損傷を出来る限り防ぎ、少しでも効率を上げる為に、ご丁寧に痛みや恐怖、幸福感や快感なんていう余計なオプションまで付けてね。」

「つまり、そこで最初に生み出された魂・・・それこそが始まりの子・・・。」

「そう。そして更に神様は、効率を上げる為に魂のコピーまで造り上げた。肉体という器を介して、とにかくたくさんの記憶をオリジナルの魂に保存できるようにね。それが生き物の繁殖機能さ。ただし、オリジナルの記憶母体・・・即ち、始まりの子の魂だけはコピーで代用することは出来ない。だから始まりの子の魂を宿した肉体が消滅すると、次の新しい、出来る限り波長の合う肉体に転移するよう細工を施した。それが生まれ変わり、転生するってことなんだ。」

「・・・。」

理解できないことはないが、余りにスケールの大き過ぎる話だ。俺が始まりの子で、オリジナル・・・？

「本来なら、転生した時点で前世での記憶は、器に合わせて調整される。だから、普通なら前世での記憶をそのまま残して転生することなんて有り得ない。だけど君の場合、なんらかの原因で、新しい肉体に転移されずに、すでにコピーの魂が役割を終えた後の器に転移した。だから、リセットされずにそのままの記憶で生きているというわけさ。ただイレギュラーなだけに調整が巧くいかずに、記憶をちゃんと取り戻せてないわけなんだけどね。」

「・・・そんな話を、俺に信じろと？」

「別に信じる信じないは君の勝手だよ。・・・ただ、イレギュラーな存在をそのままにしておくことを『神様』は許さない。一度その器の役目を終わらせ、もう一度転生させてみるか、それとも・・・」

一瞬、アトウラの眼孔が鋭く光る。俺は、身の気がよだつほどの恐怖を感じ、椅子から一步引き、懐の拳銃を構える。

「それはつまり、俺を殺すということか。」

構えたまま、問う。

「・・・ふふ、今、僕のことを『恐れ』たね？どうやら神が君達に備えた機能は正常に働いているみたいだ。・・・安心して、僕は君を殺したりしない。というか、出来ないんだ。そういう風に神が造ったからね、僕のことを。僕たちは、基本的には君達に関わる事が出来ない。君達の生や死については特に、ね。」

トリガーに力を込める。

「それも、信じろと？」

いつでも撃てる態勢を維持する。

「嘘だと思っなら、その、『人の造りし刃』で僕を撃ち抜いてみなよ。」

言われなくとも。

俺はトリガーを引いた。乾いた銃声が響く

第八幕 神話

- 8 -

「……。」

俺の放った弾丸は、彼の眉間を貫いた。そして、それは水中に吸い込まれるが如く 消えた。

確かに俺はアトウラの眉間を狙って撃ったはず。そして弾丸はそこに命中したはずなのに……彼は更に続ける。

「……解ったかい？君は僕を傷付けることが絶対に出来ない。同じように、僕も君を、君達を傷付けることは絶対に出来ない。あつてはならないんだよ、君達と損得を分け隔てるのが。それが、僕を生み出した神の意思ってわけ。」

「……貴様は……何者だ……？」

「理解したと受け取っていいのかな？……そうだね、僕は、君達が言うところの……『審判』いや、『裁定者』と言ったほうが正しいか。だからこそ、僕はこの世界に於いて常にいかなるものより中立でなければならない。それこそが、神様が定めたルールなのさ。」

「……良く分らんが、つまり貴様は俺をどうするつもりだ？」

「別にどうもしないさ。長い長い歴史の中で、神様にさえ予期出来ない事態だって無いとは言えないんだもの。僕は、ただ君にそれを説明しなきゃいけなかっただけ。更なるアンバランスを防ぐ為にね。」

あとは・・・そう好奇心かな。君の魂はどちらかと言うと僕たちに近い。・・・兄弟、いや従兄弟かな？君とお話がしてみたかっただけ。それに・・・。」

と彼は言いかけて考え直す。

「・・・いや、それは後にしよう。君の質問に対する答えはここままでだよ。・・・他に何か聞きたいことはあるかい？」

「・・・神様つて奴は何のために俺達人間を造った？」

「君達らしい実に素直な疑問だ。・・・今まで幾多の人間がそれを求めた。いや、全ての人間達の根底にあると言ってもいい疑問だね、それは。」

彼は、大分温くなったハーブティーを口に入れ、続ける。

「・・・でもね、その大いなる意思に、『理由』なんてないんだ。簡単に言つと、気まぐれ、というほうが解りやすいのかな。だから例えば君達が一人残らず滅亡したとしても、神様は何も言わないさ。それも一つの『結果』だからね。」

「・・・要は造りっぱなしで放置つてことか。随分と無責任な神様なんだな。」

俺が皮肉を洩らす。

「あはは、そういうわけでもないんだけどね。我らの神が、何をモチーフに僕たちを造り賜れたと思う？・・・神、自身さ。大いなる神は、自らの魂を幾つかに分け、始まりの子らと、七つの裁定者の

魂を造り賜れた。或る者は獣の姿、或る者は草木の姿、或る者は魚の姿、そして或る者は君達のようなヒトの姿にね。この地球に存在する全ての生命は、神そのものと言っても過言じゃない。神を模して造られた、言わば『神の分身』なのだから。」

・・・神論や進化論に興味は無い。俺は、自分の探しているものとこの曖昧な記憶がはつきりしさえすればいい。

「それで、俺の記憶はいつ戻るんだ？」

「言ったでしょ？僕たちは基本的には君達に介入することは出来ないと。君の記憶がいつ戻るかなんて、僕には分からないさ。」

それでは、俺は何のためにわざわざここに来たというのだ。肝心な部分に分からなければ意味がないではないか。

俺は、アトウラを睨みつける。

「そんな怖い顔をしないでよ。話は最後まで聞いて。・・・確かに、君の記憶がいつ戻るかなんて僕には分かるわけがない。でも、僕だって仮にも『裁定者』だよ？・・・君が転生する前、元の軀で生きていた時の姿はちゃんと観ていたさ。君は確かに何かを探していた。裁定者の僕には解らないけれど、それは君にとつてとても大切で、かけがえの無い何かには違いない。そして、君はこの街に居た。これだけ分かればどうにか手掛りになるんじゃないかな？」

俺はその言葉を聞いて、とりあえずは安心した。この胸の中にある曖昧な記憶が少なくとも的外れなものではないと解ったからだ。

「探しているのは何なのかは分からないのか？」

「残念だけど、そこまでは……。でも乗り掛かった船だ。出来る限りは力になるよ。ついでと言ってはなんだけど……。僕の手件をのんでもらう代わりにね。」

「交換条件、ってわけか。」

「安心して、それほど難しいことじゃないよ。まず一つ、このテストタロットサのことは口外しないこと。まあ、普通の人間には僕の姿は見えないし、このテストタロットサにすらたどり着くことは出来ないんだけどね。」

「こいつはいいのか？」

俺は、隣で呆然と話を聞いている少年を指差す。

「え……。っあ、あたしは……。っ……。」

ん？今、自分のことを……。もしかして、こいつは？

「そう、もう一つがそれだ。普通の人間にはたどり着けないはずのテストタロットサ、更には見えないはずの僕の姿が見えている……。っ魂ってね、関わりの深い魂同士は互いにひかれあうんだ。だから、この子の場合もきつと君と近い位置……。もしくは、遠い昔に互いに関わりあいのあった魂を持っているのかもしれない……。失礼ながらお嬢さん、今までの話は聞いていたよね？僕は君のこともずっと観ていた。行く宛てが無いのなら、この無愛想な男についてゆくといい。無愛想だが、悪い男じゃない。この『裁定者』、アトウラが保証するよ。」

お嬢……。って、やはり女だったのか……。って。

「ちょっと待て！無愛想も余計なお世話だが、ついて行けとはどういうことだ！大体勝手に……。」

「おやおや、『袖擦り合うも多生の縁』、という言葉を知らないのかい？君が助けたことも何かの縁だ。どうせなら最後まで責任を持つてみようよ。」

「それとこれとは別の話だ！大体が、俺は場合によっては危険な目に合うかもしれないんだぞ！？それに、男ならともかくこいつは女だ！それを簡単に……。」「

「だからこそ、だよ。原因は解らないとはいえ、君は僕にとってもイレギュラーな存在だ。とても興味深い。生まれ落ちてから永久の時を生きてきた僕ですら、君のような存在は初めてなんだよ。簡単に死んで欲しくない。彼女と一緒になら、君も無茶は出来ないだろ。・
・それに、女性を守るのは男の役目だ。君も男なら覚悟を決めなよ。これは『条件』だよ。君にとっても悪くない話だと思うけどね。」

いけしゃしゃーとこいつは……。

「……。」

「あ……。」

少年……もとい、少女と眼が合う。少女はおずおずとこちらを伺っている。

……そうだ、俺はともかく、この娘の意思はどうなんだ？

「・・・異論はないみたいだね？お嬢さん、君はどうだい？」

「え・・・あ、あたしはその・・・っ・・・。」

そうだ、こんな若い娘が、何処の馬の骨とも知れぬ男と行動するなんて嫌に決まっている。

「その・・・あのっ・・・か、彼が良ければ・・・。」

ああ、そうだ、そりゃ断るだろう・・・って！？

「・・・お前、本気か？」

「え・・・？」

「よし！互いに異論がないなら決まりだ。そうと決まれば、後は若い二人に任せるよ。何かあればいつでもこのテストロッサに来ればいい。僕はいつでもここに居るから。」

な、なんでこんなことに・・・。

そうして、俺と、この無防備な少女との生活が始まった。・・・この先、一体どうなることか・・・。

第九幕 記憶

・・・不完全なる魂の記録。奏でる旋律こそが生きとし生ける者たちをより美しく魅せるのか。

我等が偉大なる神、
x
(音読不能、以後クウルトゥルと表記)の造り賜れた世界は、更にはそれ以上の全てを産み出すきっかけとなった。

先ず賜れたのは自らの魂の分かち身。始まりの子、クリアト。次にファロミュ、エイセレト、ティセリイス。二十七の始まりの子を賜れた後、最後に賜れた二十八番目の子、アトウモス。始まりにして終末の子。

アトウモスを産み出した後、クウルトゥルは自らの肉体を七つに裂き、それぞれを個々として創造する。

アストアラト、アトウラクナクア、エゼブブ、イアクグア、イエヴ、アプハウス、グアタノトウア。

神の肉より出でし彼等を裁定者と名付け、全ての愛すべき子たちの礎となるよう、命じる。

七つの裁定者達に課せられた使命は三つ。一つは魂の誘導。一つは永遠の観測。そして一つは、終末の子、アトウモスの幽閉、監視。始まりにして終末を司る、忌むべき子、アトウモス。神は自ら造り賜れた世界を失うことを恐れ、彼を幽閉し、来るべき時が来るまで封印するとした。

或る旧きものは、クウルトゥルの行為を嘲った。或る旧きものは、彼等の行為をとて興味深いものとして観ていた。

同じく旧きものであるクウルトゥル自身もまた自らを嘲り、忌み嫌ったが、その忌むべきものを大いなる愛と呼び、その言葉を最後に、彼もまた永き眠りにつく。

第十幕 戸惑い

- 10 -

一体何故こんなことになってしまったのか。

俺は、テストロッサを後にし、アパートに戻ってきていた。成り行き上、途中で助けてしまった少年 いや、正しくは少女だったのだが も一緒にだ。ベッドに腰かけて、何度も考える。

『一体何故こんなことになってしまったのか』。

少女は、部屋の扉の横に立って、やはりおずおずとこちらを伺っている。

どうしろと。

アトウラのせいだ。しかもつと言えば、俺の目の前で逃走劇を繰り広げたこいつも悪い。ということとは・・・元を正せばあのチンピラ二人組が悪い・・・手足の二本か三本でもバラバラにして出来の悪い顔を更には化け物顔にするくらいしてやりゃよかった・・・。

・・・ん？そう言えば・・・。

「・・・おい、お前。」

「えっ！？は、はいっ！！」

いきなり呼ばれ、体が痙攣したかのような反応の少女。

「そう言えば、なんでお前あんなチンピラに追い掛けられてたんだ？」

「あっ・・・いやその・・・あのですね・・・。」

少女は口籠ると、躊躇いながらも、話し出す。

要約すると、こうだ。

路地を歩いていると、怖そうな二人組に呼びとめられた。金を要求してきたので断ると、凄まれたので謝ろうとして思いっきり頭を下げると、スキンヘッドの男の股間に直撃。以下略。

ということらしい。

「そ、そんなつもりはなかったんですけど、その・・・なんというか・・・。」

尚も申し訳なさそうに言い訳しようとする少女を見て、思わず俺は・・・

「・・・ぶっ・・・。」

「えっ?」

「く・・・くっくっく・・・あっはっははは!!」

思わず、吹き出してしまっていた。少女は何事が解らず、ぽかんとしている。

「あ、あの& amp;#12316;・・・。」

股間に頭突きを喰らいながら悶絶するスキンヘッドを想像すると、笑いが止まらなかった。その後、俺にまで投げ飛ばされたんだからスキンヘッドも災難だったろう。もしかしたらまだ頭を茹で蛸のよ

うにして探し回ってるんじゃないだろうか。

「くっはは・・・す、すまん、余りにおかしかったんで、つい、な。しかし股間に頭突きか・・・ぶつくはは・・・。」

「ひ、酷いです！結構必死だったんですよっ！」

少女が、顔を真っ赤にして泣きそうな顔で怒る素振りをする。俺は必死で笑いを堪えながら謝る。

「す、すまん・・・いやしかし、そいつも相当災難だったな。」

「はい・・・悪いことをしちゃいました・・・。きちんと謝りたかったんですけど、怖い顔で襲ってくるんで、つい逃げちゃって・・・。」

「いや、お前は悪くないさ。気にするな、スキンヘッドの自業自得だからな。」

「・・・そうなんですか？」

「ああそつだ。・・・ところで、お前、名前は？」

「え・・・あ、あたし、イリシアって言います！イリシア＝ケルファ！」

「そうか、イリシア。お前、なんでそんな変装みたいな格好を？ぱつと見、男の子みたいだぞ。」

実際、テストロッサで知るまで、少年だとばかり思っていた。

「えっと・・・そのほうが危なくないからって聞いて・・・あの・・・あたし施設から・・・その、抜け出して・・・きたんです。」

「施設？」

「はい。・・・あたし、孤児だったんです。両親の顔は知らないですけど・・・聞いた話だと、忌み子だからと・・・。」

「忌み子・・・というと・・・。」

どういうことだと言おうとしたとき、イリシアが、ずっと被ったままだった帽子を取った。

黄金色に輝く金髪。フロント帽子を深く被っているときは気付かなかったが、大きな瞳。端正な顔立ち。こうして見ると、なかなか美しい少女だった。だが、瞳を良く見て、気が付いた。

「・・・オッド・アイか・・・。」

右目は空の色を映したような蒼。左目は、エメラルドのような、碧色をしていた。

「この両目のせいで・・・あたしは両親に捨てられたと聞きました。でも、一度でいいから・・・一目、両親に会いたくて・・・。」

「成程、それで施設を飛び出してきたってわけか。」

「はい・・・それでうろつろしていたら、後はさっき言った通りで・・・。」

「それならそれで、施設の先生とかに相談出来なかったのか？」

「相談はしました。でも、先生達は『ダメだ』としか言わなくて・・。」

成程・・。そこまで否定されるということは、よっぽどな親か、それとももう・・。

「それであたし、施設を抜け出そうって決めたんです。会わせてくれないのなら、自力で会いに行く！って決めたんですが・・。」

「宛てはあるのか？」

「いえ、それが・・。この世界の、何処かってことしか・・。」

世界の何処か・・。

この世界は余りに広すぎる。しかもイリシアの親が施設に預けに来たとすれば、結構な遠い場所にするはず。すぐに帰ってこれる場所では困るからだ。特に理由が貧困等でなく、『忌み子』だからなんて理由ならなおさらだ。

しかしこの時代に於いて『忌み子』だからなどと・・。時代錯誤甚だしい。確かに、地域や国、宗教などによつては未だにそういった観念が残っている処も少なくはないが。

「それで、どうやって探すつもりだったんだ？手掛りはそれしかないんだろ？」

「あ・・。いえ、もう一つあります！これ・・。」

イリシアは胸元から、ペンダントを取り出す。細かい金細工の入っ

た、高そうなペンダントだ。真ん中には、これもまた高そうな宝石まで入っている。

「施設に預けられる時に、母が渡してくれたネックレスだそうです。これが手掛りにならないかなって……。」

「確かに滅多にないほどの代物だが……お前、さっきのダウンタウンでこれを誰かに見せたりしなかったらうな？」

「え？あ、いや、まだ……。」

やはり見せて歩くつもりだったのか。

「……なら、これからは気を付ける。こんなモノを見せて歩いたら、恐喝だけじゃ済まんぞ。下手したら命ごと持ってかれる。」

「えっ！？そ、そんなんですかっ！？」

世間を知らないとはいえ、余りに命知らずな行動だ。

「結論から言うのだ。……お前、施設へ帰れ。親を探すのなら、成人して社会に出てからでも出来るだろう。」

イリシアは一瞬びくつとした後、涙目になりながらも返してくる。

「いつ、嫌ですっ！！絶対に戻りません！！何でもします！！ここに……ここに置いてください、お願いしますっ！！」

必死で頭を下げる。

しかし……こんな世間知らずの面倒を見れるほど俺も暇じゃない。

「ダメだ。．．．どうしても言うのなら、さっきのテストロッサにでも行け。あいつなら何か良い方法でも知ってるだろう。」

「．．．っ．．．。」

イリシアは、顔を下げたまま震えていた。しばらくした後、口を開く。

「．．．どうしても．．．ダメ．．．ですか．．．？」

俺は、何も言わない。

「．．．．．。」

沈黙が続いた後、再度口を開いたのはイリシアだった。

「．．．分かりました．．．。一人でも．．．探してみせます．．．
．助けてくれて、ありがとうございました。」

うつ向いたまま、帽子を被る。

ドアの閉まる音がする。

「．．．これでいい。そのうち、諦めて施設に戻るだろう。」

俺は、胸ポケットから煙草を取り出して、フィルターを噛みながら火を点ける。しばらく、ぼおとしたまま、煙を吸い込む。外はすでに真っ暗だ。懐中時計を取り出して時刻を見ると、すでに二十時を回っていた。

俺は、何も考えないようにする。

そういえば、あのチンピラどもはどうしたろう。さすがにまだ探し回っているという事は無いだろうが・・・。

考えないようにすればするほど、嫌な予感がする。しかし俺には関係のないことだ。

・・・今日はもう、寝るか・・・。

少し早いが、今日は余りに色々なことがあった。

部屋の灯りを消してベッドに転がる。

・・・明日がくれば。明日がくれば、また俺は探さなきゃならない。自分自身の記憶を。大丈夫さ。不安なんて何もない。言い聞かせながら、闇の中に堕ちていった。

第十一幕 岸壁

- 11 -

トボトボと、もう真っ暗になってしまった街を歩いていた。

元々一人で頑張ろうと思っていたんだから。大丈夫、なんとかなる。

あたしは胸のペンダントを握り締めると、一人きりでそう呟く。

何故か、涙が出た。だけど悲しくない。悲しくなんか、ない。

あの人の言う通り、あそこへ行こう。『テストロッサ』へ。調べてもらえば分かるはず。だって、あたしのことだって見てたって言うてたもんね。パパとママのことだって、きっと分かる。うん、そうしよう。

涙を拭って、帽子を更に深く被り直す。

もう一度、あの街へ一人で行くのは気が少し引けたけど、仕方ない。自分のことだもの。他人に頼るのは間違ってる。・・・元々そう考えて施設を出てきたんだから、後悔はしない。・・・後悔なんてしないはず・・・なのに。

なんでだろう。また涙が込み上げてきた。

目が霞んで、視界が悪い。あたしはふらふらしながら、あの街へ向かっていた。

ドンッ

誰かにぶつかって、少しよろめく。

「あっ！・・・ごめんなさいっ！」

頭を思いっきり下げる。相手の顔は見えない。反応が無いので、あたしは顔を上げる。

「あっ！」

思わず、声をあげてしまった。

「・・・見つけたぞ、クソガキいい〜!!」

あの時の、髪の毛の無い人だ。あたしは、その怖い顔に驚いて、また逃げだした。が。その瞬間、後ろに居た人に腕を捕まれた。

「今度は逃がさねえぞ・・・。」

後ろにいたのは、もう一人の、装飾品をいっぱいつけた細身の男の人だった。

「クソガキが、散々探したぜえ・・・手間あ取らせやがってっ!!」

路地の裏に引きずり込まれ、壁に叩きつけられる。

「っ!!・・・。」

背中を強く打って、口の中に鉄の味が広がる。息が詰まって、一瞬呼吸が出来なくなった。

「うっ　　つくはあ！！・・・げほっ！げほっ！」
苦しくなって、吐いてしまう。丸一日何も食べてなかったから、胃液しか出ない。口の中が、鉄の味と胃液の苦い味で、もう散々だった。

「一緒に居た野郎はどこ行った？あの野郎もぶんなぐらねえと気が済まねえっ！！」

頭をつかんで、軽々と持ち上げられる。次の瞬間、ふうつと躰が浮いて、もう一度投げ飛ばされた。

今度は、後ろにあったゴミ箱がクッションになって、それほど衝撃はなかったけれど、生ゴミの強い臭いで躰中がびしょびしよだ。あたしはなんとか起き上がる。

「っ・・・はあ・・・はあ・・・あ、あの人は・・・関係・・・ないです・・・。」

「あああっ！！??？」

スキンヘッドの男の人がまた怖い顔をしてこっちを睨んでいる。

「　　っおい待て、こいつ　　。」

派手な人が、あたしを見て口を開けている。　　っ！？しまった、さっきの衝撃で帽子が　　。

「　　おいおい、こいつ女だったのかよ。」

「しかもこいつぁ・・・へっへっ、大したもんじゃねえか・・・。」

スキンヘッドの男が、舌を出しながらゆっくりと近付いてくる。

怖い。

心からの恐怖を感じて、逃げようとしたけれど、臍を強く打ったせいで思うように動けない。尚も男はゆっくりと近付く。

「へっへっへ・・・最初っからそう言やぁいいのによぁ・・・女だつて分かつてりやぁ、こんな手荒な真似しなかったんだ・・・。」

スキンヘッドの、荒々しい掌が、あたしの腕を掴む。

「いやっ！ やめて・・・くださ・・・。」

あたしには、懇願することしか出来なかった。

腕を掴んだまま、顎を無理矢理挙げさせられる。恐怖と痛みで視界が定まらないが、多分涙も流しているんだろう。急に自分で自分が情けなくなつた。

あの人の言う通り、おとなしく施設に戻っていればこんなことにはならなかったのに。

「うへへ・・・いい顔してくれるじゃねえかぁ・・・俺あな、そういうの好きだぜえ？」

下品な声が脳に響く。次の瞬間、胸元の服を引き裂かれた。

「いやぁぁぁ！！やだ・・・やだぁやめてえ・・・っ！」

それでもあたしは必死で懇願することしか出来ない。不意に、男の興味が別に向く。

「・・・ん？なんだあこのペンダントは・・・。嬢ちゃん、いいもん持ってんじゃないか。こりゃ売り飛ばしやあ結構な値がつくぜ・・・？」

男の掌が、胸元のペンダントに掛る。

ママのくれたペンダント。両親の唯一の手掛り。

瞬間、あたしは最後の力を振り絞り、男の掌からペンダントを奪い返す。

「　　つてえな、なにしやがんだこのアマあつつ！！！！」

男が、大きく右手をふりかぶる。あたしは、来るべき衝撃を覚悟し、目を固く瞑った。

第十二幕 圧倒

- 1 2 -

・
・
・
・
・
・

ほんの、数秒間のことだと思う。

あたしは、衝撃を覚悟して目を瞑っていた。

・・・しかし、いつまで経っても男の振り上げた右手は降りてこない。代わりに、男の驚いたような声が、耳に入ってきた。

「
てっ・・・テメエ っ!!」

その次の瞬間、あたしはスキンヘッドの重い腕から解放された。

恐る恐る、瞳を開けると、眼に映ったのは居るはずのない、あの人があった。

「
っ!!」

スキンヘッドの躰が、物凄い勢いで地面に叩き付けられる。男は何かを言おうとしたけれど、それが言葉になるよりも早く、男の躰はもう一度彼の拳によって地面にめり込み、言葉になるはずだったものは、悲痛のうめき声にしかならなかった。

彼の拳が、二度、三度と男の顔面に叩き付けられる。その度に、骨が割れるような、何かを擦り潰すような音が辺りに響く。

「ひっ！ひひひひ!!」

派手な男は、傍らで腰を抜かしたかのように座り込んで、目の前の壮絶な暴力に気圧されていた。

「があっ ぐあっ わ・・・わるっ・・・。」

殴られている男が何かを言おうとしているけれど、構わずに叩きつけられる両方の拳。時間にしてほんの一分、いや数十秒のことだったかもしれない。突然、彼の動きが止まる。

待っていたとばかりに、スキンヘッドの男が言葉に出来なかった何かを、息も絶え絶えで言葉にする。

「 おっ・・・俺がわる・・・悪かったあ・・・もう、も、勘弁してくれえ・・・。」

かすれそうな、涙混じりの声だ。しかし、彼はそんな言葉は微塵も気にせず、長いコートの懷から何かを取り出して、男の額に突き付ける。

それは、テストロッサであの緋色の髪の子を撃った、黒い鉄の塊。

少年が言った、『人の造りし刃』。

それは、拳銃だった。

男も、ソレに気付いたようだ。必死で懇願する。

「や やめてくれえっ！！いのっ、命だけは、どうか、どうかあっ！」

足をバタつかせて必死で抵抗するが、馬乗りになった彼の左腕にしっかりと捕まえられていて身動きが取れない。男はまるで気が狂った

かのように命乞いし、懇願する。そしてやっと、彼が口を開く。

「・・・汚い血と脳髓で汚れたくなけりゃ、どいてろ。」

それは、傍らで腰を抜かしていた派手な男への言葉だった。

派手な男は、奇声を上げて転びながら逃げてゆく。まるで、悪夢でも見たかのように。

本当に殺す気だ。

あたしは、動かない躰を必死で彼のほうへ進める。声がなかなか出ない。

「だ・・・だめ・・・。」

あたしの為に、彼を人殺しになんてしちや駄目だ。

あたしは、必死で彼にやめたと告げようとするが、さっきのショックか、声にならない。

彼の指が、引き金をゆっくりと絞める。

男は、足をぴくぴくとしながら、か細い声で尚も哀願する。彼が最後の言葉を発する。

「・・・死ね。」

次の瞬間、暗闇に耳をつんざくような銃声が響きわたっていた。

第十三幕 安堵

- 13 -

銃声に驚き、^{カラス}鳥が飛び立つ。

俺の放った弾丸は、スキンヘッドの汚い頭をかすめ、数センチほどの弾痕を残して何処かに消えていた。

スキンヘッドはそれまでの痛みと銃声のショックで、白眼を剥いて、口から泡を吐いていた。

これだけの目に遭えば、二度と俺たちに近付くまい。俺は、男から離れると、イリシアのほうに近付く。

「大丈夫か？」

イリシアは大きく眼を見開いている。

「こ・・・殺しちゃったんです・・・か？」

泣きそうな顔をして男と俺を見比べるイリシア。

・・・こんな目に遇っても他人を心配するのか、この娘は。

「・・・脅しただけだ。今は気を失ってるがな。当分起きんだろう。」

俺の言葉を聞いて、一瞬安堵を洩らす。

だが、次の瞬間、一気に表情が歪む。

「・・・っひいっ・・・うああ・・・っ!。」

「おい、どうした!? 何処か痛むのかっ!？」

イリシアは、ぶんぶんと首を振ると、俺の腕にしがみつき、大声で泣きじゃくっていた。

緊張が取れた安心感からだろう。俺は、背中をさすってやりながら、しばらくの間、腕の中のイリシアを見守っていた。

しばらくすると、安心したのだろう。イリシアは俺の腕の中で、すうすうと寝息を立て始めた。

「・・・やれやれ・・・。」

俺は、イリシアにコートを着せてやると、背負って、路地裏を後にする。

とりあえずは、戻るしかあるまい。

そう考えた俺はアパートへの岐路についた。

第十四幕 信頼

- 14 -

「・・・気が付くと、あたしは彼の背中に居た。大きな背中。暖かいと感じたのは、彼の黒いコートをあたしが着込んでいたからだろうか。」

「あ・・・あのつ、ここはっ・・・つつう！」

彼に話しかけようとして、全身に痛みが走る。

どうして・・・？なんであたしは彼の背中に・・・あれ？どうしたんだろうこの躰の痛みは。

あたしは、記憶を遡ろうとする。

「・・・起きたか。無理をするな。大分酷くやられたな。痣だらけだぞ。」

「・・・そうか、あたし、あのまま気を失って。」

「え・・・えと、助けてくれた・・・んですよね？」

我ながら間抜けな問いだとは思ったけれど、余り記憶がはっきりしない。

「・・・まあ、元はと言えば俺が中途半端に扱ったせいもあるからな。連中のような輩は徹底的にやらんとああなる。しつこいんだ、ゴキブリ並にな。」

彼が、冗談っぽく言う。・・・こんな優しい喋り方もできる人なんだ。

正直、アトウラさんの言う通り、無愛想な人なんだと思ってた。

「だが、間に合って良かった。すまん、あんなことになるのなら、せめて一晩くらいは泊めてやればよかったな。」

彼の言葉で、記憶が段々はつきりしてきた。男たちに乱暴されそうになって、もう駄目だって思ったら、彼が居て・・・。

もし、彼が来てくれなかったらと思うと身震いするほどゾツとする。・・・でも、その恐怖は、彼の背中の暖かさですぐ洗い流されてゆく。

「躰は・・・どうだ？痛いかな？」

彼が、気遣ってくれる。本当は全身がバラバラになりそうなくらい痛かったけれど、あたしは敢えて、大丈夫です、とだけ答えた。すると彼は、しばらく沈黙した後、話し出す。

「・・・はつきり言っとく。お前の両親な、もしかしたら、もうこの世には居ないかもしれん。もし生きていたとしても、手掛りがほとんどないんだ、いつ見付かるかも分からん。」

彼が、淡々と話す。

「はい・・・あたしも、それは分かってます・・・。」

もしかしたら、すでに亡くなっている。・・・何度も考えたことだ。それでもあたしは・・・。

不意に、彼がふふつと笑った。そして言葉を続ける。

「それでも・・・お前は引かないんだろうな。何せ、お前は言い出したら聞かない。」

「はい・・・生きている可能性が少しでもあるのなら・・・いえ、もし亡くなっていたとしても・・・それでも探したい。お墓に祈るだけでもいいんです。一目・・・会いたい・・・。」

彼の背中に捕まった手に、ぎゅつと力が入る。

「・・・俺も、自分の記憶を探したい。何か大切なものが・・・この胸の中にあるんだ。俺は、探さなきゃならない。」

あたしは何も言わず、彼の言葉ひとつひとつに耳を傾ける。

「もしかしたら、今日よりずっと危険なこともあるかもしれない。・・・それでも・・・。」

彼は、少し戸惑った様子で、続ける。彼の言葉と、思いと、優しさの一つ一つを噛み締めていると、あたしは何故か、涙を流していた。

「それでもいいのなら・・・俺と・・・一緒に、行くか・・・？」

涙に堪えながら、あたしは、言葉を絞り出す。

「・・・はいっ・・・。」

彼の背中がとても優しく、あたしは、夢中でしがみついていた。

この背中・・・彼になら、安心してついて行ける。どれだけ危険なことでも、彼とならきつと乗り越えて行ける。あたしは、細やかな幸せを、ずっと離したくないと願っていた。

第十五幕 裁定者と傍観者

- 15 -

「どうやら、若い二人はなんとか上手くやれそうだね。」

緋色の髪の少年は、一人呟いて見せた。その全てを映す、碧い眼は、二人の様子に興味深そうに見守る。

長く、全ての生物、全ての生命を見守ってきた『裁定者』たる彼は、それでもこの二人のことをとても楽しそうに見つめていた。

「楽しそうじゃないか、アトウラクナクア。」

誰も訪れるはずの無いこの部屋の一室に、少年を忌まわしき旧き名で呼ぶ者が突然に現れる。

「・・・なんだ、君か。何か用？」

少年は眼を向けることすらせずに、気だるそうな態度を取って見せる。

「ご挨拶だなあ。せっかく君に良いことを教えてあげようと思ったのに。君の見つけた彼等の様子はどうだい？」

「別に、何も変わってやしないさ。彼等はすでに『大いなる母』の手を離れた。僕に出来ることは、見守るくらいだからね。」

突然の訪問者は、自嘲するかのように肩をすくめると少年を諭すよ

うに言う。

「まだ『あのこと』を根に持つてるのかい？言っただろう？アレに
関しては私は何も関与してないって。むしろ私のほうが彼らに腹を
立てたくらいだからね。何せ彼らは『旧き盟約』をなんとも思っ
ちやいない。・・・長く生き過ぎたんだよ。今じゃ彼らは何よりも愚
かさ。」

「はっ、どうだか。そんなことを言うなら、君だって彼らと同じじ
やないか。」

尚も少年は来訪者に食って掛る。

「あの時・・・『ルルイエの審判』の時、君が取った行動を忘れた
とは言わせないよ、ナイアラ。いや・・・ナイアルラトホテップ！
！」

少年がナイアルラトホテップと呼んだ、隻眼の女の姿をした来訪者
は、悪びれもせず言い返す。

「・・・だから何度も説明しただろう？あの時はああするしか方法
がなかったんだ。君の、いや君達の母、『クウルトウル』が残した
この大いなる遺産、この世界の形を留めておくにはね。」

「・・・そのせいで多くの兄弟達が無に還った。長い年月を掛けて
集めた『記憶』も、半分以上が消え去ってしまったんだ。」

少年は齒を噛み締める。

「・・・。」

隻眼の女は、何も言わない。ただ少年だけが、沈黙の中で悔しさを噛み締めていた。

「・・・『旧きものども』が再びうごめき出した。今日はそれを君に伝えに来た。」

「　　っ！」

今度ばかりは、アトウラも反応した。・・・あの、悲劇がまた、繰り返されようとしているのかと。少年は、ナイアルラトホテップ
　　ナイアラを深く見据えて、再び沈黙の中へ。そして口を開いたのはやはりナイアラのほうだった。

「・・・ははっ、全く、無駄に年ばかり費やした老人どもは嫌になるよ。・・・もうすでに『旧き盟約』など彼らの退化してしまった『記憶』の中には微塵も無いんだろ。・・・そうなることを恐れたのかもしれないな、クウルトゥルは。」

「・・・自分は違っても言いたげだな、君は。」

「さて、どうかな？」

ナイアラは更に自嘲すると、続ける。

「『旧きものども』は、今回は『アトウモス』を目覚めさせようとしている。ゲームが何かと勘違いしているんだあのジジイどもは。・・・まあ、元々『旧きものども』の行動に『理由』なんてないんだっけね？君の持論では。」

「・・・ああ、同じことさ。『ルルイエ』を呼び出すのも、『アトウモス』の封印を解くのも、やろうとしていることは全て同じ。・・・要するに、彼らは『クウルトウル』のしたこと全てが気に入らないだけさ。」

「ははっ！・・・そうかもしれないね。で？・・・君はどう出るつもりなんだい？」

アトウラはしばらく考える。『アトウモス』。この名前は良く知っている。我らが母、『クウルトウル』が、最期に産んだ『始まりの子』。忌むべき存在。そして同時に、同じように大いなる母の永久の愛を受けて産まれた、愛すべき兄弟。『クウルトウル』は彼の者を幽閉して、我々七体の『裁定者』の監視の下に置いた。

・・・事實は識らない。それを大いなる神は我らに告げなかったから。ただ、『始まりにして終末の子』とだけ聞いている。・・・彼の者が目覚める時こそ、この世界の終局だと。

「・・・今度は必ず、食い止めてみせるさ。」

アトウラは一言だけ、そう告げた。

ナイアラは口の端に笑みを浮かべ、君ならそう答えると思った、とだけ発した。

その後は、識るべき処ではない。

第十六幕 戯れ

- 16 -

結局、俺達二人はアパートに戻っていた。

イリシアをシャワールームへやり、俺は、替えの服を探す。

・・・女物の衣服などあるわけが無い。あつたらあつたで色々問題もあるが。なんとか、俺のシャツの替えを見つけ、それで代用してもらうことにした。

・・・問題は、下着である。これもまた、俺の部屋にあつたとしても色々問題だ。この駄の主の趣味までは知らないが、少なくとも俺にはそんな趣味はない。

色々と考えた結果、俺は仕方なく、近くのコンビニエンスストアに行くことにした。

近頃は便利になった。時刻は二十二時を過ぎようとしていたが、街道に出たすぐにあるコンビニエンスストアは何時でも開いていた。

俺は店に入り、女物の下着を手取る。

・・・待て、ちょっとこの絵は問題あるんじゃないか？

俺は、女物の下着や小物が置いてあるコーナーで、手を伸ばしたまましばらく固まってしまった。

はつと我に返ると、店員の女がこちらを見ながらクスクスと笑っていた・・・ように思えた。気恥ずかしくなって、店内にあつたバスケットを手にとると、下着を入れ、上からパンや飲み物を詰める。

湿布薬なども売っていたのでついに入れた。後は何を買ったか覚えていない。

レジで会計を済ませている最中、俺はどんな顔をしていたらうか。・・・明日はとりあえずイリシアを連れて買い物に行こう、自分で必要な物を全部揃えてもらおうと決めた。こんな思いは二度とした

くない。

アパートに戻ると、イリシアがシャワールームから出ていた。

「あ……何処に行つてたんですか？」

俺は、買い物に出ていたことを告げる。そして、コンビニの袋を手渡すと、イリシアは中身を見て、真っ赤になった。

「こ……こここれって　　っ！」

「……言つな、それ以上は！」

「……は……はいい……。」

多分、二人して真っ赤になっていたのだろう。しばらく沈黙が続く。

……そういえば、俺のシャツを着ているが……その下はどうしたんだろう……と、一瞬考えて彼女と目が合ったが、イリシアはまた顔を真っ赤にして一言言う。

「え、えと……じゃ、じゃあ着けて来ますねっ！」

そのまま、再度シャワールームに逃げ込むようにして入る。

……いや、これ以上考えるのはよそう。精神衛生上、良くない……。

俺は、コンビニで買った缶ビールを出して、一口飲む。……そういえば、今日一日何も食つてなかったな。

袋から、サンドウィッチを出して頬張る。そして缶ビールで流し込むと、空っぱの胃に染みた。

しばらくして、イリシアがシャワールームから出てきた。……い

や、シャツの下が、下着だけなのはこの際無視しよう。・・・無視だ無視！

「あつ・・・えと、着けてきましたっ！」

「いちいち報告せんでいいっ！」

「あは、あははは・・・。」

・・・わざとやってるんじゃないだろうなこいつ・・・。
俺は、イリシアに食事を取るように奨める。

「あつ・・・実は、お腹ペコペコだったんですよ〜。今日一日何も食べてなくて・・・。」

「・・・俺もだ。」

「どれ食べてもいいんですか？」

「ああ。俺はこいつだけで十分だ。後は全部お前が食べ。」

「え・・・ぜ、全部って・・・これ全部・・・？」

袋の中には、パンやら何やら、かなりの数がまだ残っていた。

「・・・無理か？」

「無理ですよ！・・・も〜、なんでこんなに・・・。」

「・・・色々とおったんだ・・・。」

「はひ？」

「いや、いい。思い出したくない。」

「・・・？」

結局、イリシアはパンを一つとオレンジジュースだけ飲んで、残りは朝飯に充てることにした。

「あ、そうだ。あたし、その、貴方のこと、なんて呼べばいいですかね？」

「・・・そういえば、まだ名前すら思い出してなかった。俺は考える・・・考えたが。」

「・・・分かん。」

「あつ・・・記憶、無かったんですね・・・。」

「アトウラに名前くらい聞いておけばよかったな。」

確かに、名前が無いというのは不便だ。

「じゃ、とりあえず呼び方を考えましょう！-」

イリシアの案で、しばらく禅問答が続く。

「う&#12316ん、黒い服を着てたから、ブラック

さん？」

「・・・安直過ぎやしないか？」

「え& a m p ; # 1 2 3 1 6 ; と、じゃあ、強いからスー　ーマン
っ！」

「漫画の見すぎだ。」

「えと、えと、じゃあ・・・。」

「　　ちよつと待て、お前真面目に考えてるか？」

「考えてますよ& a m p ; # 1 2 3 1 6 ; ・・・じゃあ・・・
兄さん？」

「却下だ。」

「お兄ちゃんっ！」

「変わってないだろ!!！」

「えー。いいじゃないですか、あたし兄弟ほしかったし。」

「却下だ。・・・俺の趣味かと思われる。」

「でもでも、はたから見ると兄妹って言ったほうが違和感ないですよ?。」

「そういう問題じゃない。俺じゃなくて、俺の趣味だと疑われるん

だ。」

「……?」

「……今、俺は何て言った?」

「う&p:#12316;ん、意味が解らなかったです。」

「……だよな。」

多分、何処からかの心の声に違いない。

「う&p:#12316;、じゃあどうしましょう?」

「ふむ……。」

そのまま一時間くらい試行錯誤したが、結局は『兄さん』で決まっていた。……何かの陰謀を感じる。

「えへ&p:#12316;にっいさん にっいさんっ」

「妙な歌を唄うな。」

「にいさんにいさんにいさーん」

「連呼するな。」

「……お兄ちゃん?」

「埋めるぞっ！！！」

・・・どうにも、居心地が悪い呼び方だ・・・。

「とにかく、呼び方も決まったことだし良いじゃないですか」

「いまいち釈然とせんがな・・・。」

「細かいことは気にしないっ」

妙にご機嫌だな、こいつ・・・。

ん？そういえばこいつ、歳はいくつだ？・・・見たところ、まだ十代もそこそこのようだが・・・。

「おいイリシア、ところでお前はいくつなんだ？」

「え？あたしですか？今年１７になったばかりですよ？」

・・・１７？

・・・背はともかくとして・・・。

「・・・。」

「え？え？な、なんですか・・・はっ！」

「い、いや、１７には見えんなと・・・うがっ！？」

「何処見て言ってんですかつ！！」

「い、いやまで、俺がわるかつ　　っがあっ!!」

「兄さんのヘンタイっ!!!!」

「.....」

イリシアの投げた中身入りの缶コーヒーが俺の顎に見事命中。・・・しばらくの間、脳を揺さぶられて意識を失っていた・・・。

「・・・もう、あたしはこれからなんです!」

「だから、俺が悪かったって言ってるだろ・・・。」

一気に機嫌を損ねてしまった。・・・女というのは、怖いな・・・。

結局その日は、夜中までこんな感じでワイワイとやっていた。

始めはどうなることかと思っただが・・・こういうのも悪くないと思う自分が居て、内心、少し戸惑った。

しかし、俺は記憶を取り戻さなければならぬ。そして、出来ることならイリシアも両親に会わせてやりたい。明日から、何をすべきかを考えつつ、イリシアをベッドに寝かせ、俺は毛布にくるまり冷たい床の上で眠りに堕ちて行った。

第十七幕 安息、決断

- 17 -

「う&p;#12316;・・・これもいいし、こつちも捨てがたいよね・・・。」

かれこれ一時間。

イリシアは目の前の洋服と睨み合いしていた。

「・・・どつちでもいいんじゃないか？」

俺は正直、一刻も早くこの場を逃げ出したかった。

「あ&p;#12316;んもうつ！そんなこと云わずに兄さんも選んでくださいよお！」

イリシアが、二つの洋服を両手に持ち、躰に合わせて見比べる。

・・・婦人服売り場においてこの状況は、世の男性なら羨ましがら輩も居るだろうが・・・はつきり言つて俺には拷問以外の何者でもない。周囲の視線がとてつもなく怖い。

「ね、ね、これはちょっと派手だと思つんですけど、ほらこゝ、こ可愛いすよね？・・・でもこつちのこれも可愛いなあ&p;#12316;。う&p;#12316;ん・・・兄さんはどつちが好きですか？」

「・・・どつちでもいいんじゃないか？」

俺はやはりそう答えることしか出来ない。

「もっつ！・・・う&p;#12316;ん、迷うなあ&p;#12316;・・・どっちがいいかなあ&p;#12316;・・・」

・・・このまま放って置いたらもしや閉店まで掛っても決まらないんじゃないだろうか？

俺は物凄く嫌な予感がして、結局、両方買うように促した・・・。

「えへへ&p;#12316;・・・兄さん、ありがとうござ
いますっ」

上機嫌のイリシア。

俺達は、午前のうちから買い物に出てきていた。

イリシアの生活に必要な物、その他、食料品や日用品なんかを揃える為だ。この躰の主はどういう生活をしていたのか知らないが、この街で手掛りを探す以上、あのアパートに長く滞在しなくてはいけない可能性のほうが高い。男の俺だけならまだしも、イリシアが一緒となると、あの部屋には余りにも物が少なすぎる。幸い、手持ちの金にも不自由が無かった。

イリシアは意外にも家事全般には長けているようで、そういった日用品や必需品は全てイリシアの見立てだ。小慣れた様子で次から次へと買い物を進ませる。施設での生活はほとんど子供達が自分らで行い、家事は当番制、買い物なども順番で行っていたらしい。成程、言うだけあって買い物にも無駄が無い。必要なものは全て最小限で揃えている感じだ。俺にはそこら辺の知識はまるでないので、イリシアに任せて正解だと思った。

しかし、婦人服売り場に来てからは様子が一変。あれよこれよと見

ているうち、一向に止まる気配が無くなって今に至るというわけだ。一度は場を抜け出そうとしたが、イリシアの執拗な引き留めに遭って断念。・・・さすがに下着売り場だけは昨日の悪夢が蘇って断固拒否したが。

両手に持った袋の山。サウスロタの街を大荷物を抱えて歩く男の様は、いつ見ても不憫だ。・・・まさか、自分がその状況に陥ることになるうとは思ひもしなかったが。

「・・・別に宅配でも良かったんじゃないか？」

俺が洩らす。

「駄目ですよ。この量になると宅配代も馬鹿にならないんですから。・・・さすがに冷蔵庫だけは兄さんに運んで貰うわけにもいかなかったですけど。」

・・・成程、金銭感覚にも優れているようだ。いい奥さんになれると言おうとしたがやめた。また増長しだすと今度は何処まで力を注ぐか分からない。

「・・・にしても、これだけの荷物、何処に置くつもりだ？」

「ちゃんと全部配置は考えてますよ& a m p ; # 1 2 3 1 6 ; 」

イリシアは、ニコニコとしながら俺の前を歩く。手にはこれまた買物した物の入ったスーパーマーケットの袋を下げている。

・・・ということは、この後に待っているのは・・・部屋の模様替え。いや、あれほど殺風景な部屋だ。模様替えというほど大それた

ものじゃないだろうが。

今日は一日、イリシアに振り回されそうな予感がする。・・・こんなことをしている場合なんだろうか……。俺は心の中で小さな溜め息を吐きつつ、イリシアの後を歩いていた。

「・・・これでよしと！」

アパートに着いた後のイリシアの行動は、それはそれは迅速なものだった。殺風景な部屋に、次々と生活の匂いが降り注がれてゆく。出会った当初のイリシアの面影は無いと言っても過言ではないほどの手際の良さ。・・・どうも、これがこいつの本来の姿らしい。

「あつ！兄さんそれはそっちにっ！えと、その荷物はなんでしたっけ？」

「・・・コンロだな。」

「あ、じゃあそれはキッチンに。でもキッチンというにはちょっと狭いなあ・・・。」

「仕方ないだろう、ワンルームなんだから。」

「それもそうですよね……。じゃ、冷蔵庫はここに置くとして&#12316;。あ、そろそろお店の人が来る頃ですよね？玄関片付けておかなきゃ。」

・・・と、まあこんなやりとりがしばらく続き、やっと一段落した時、玄関のブザーが鳴った。

「ちわーっ、サウスロタデパートです！」

イリシアが待ちに待った冷蔵庫の登場だ。とはいえ、小さな冷蔵庫で、せいぜい二、三日分の食料品を入れるだけで満杯になりそうなほどだが。

「いいっすねー！新婚さんっすか！？お幸せにー！！」

・・・店員は、帰り際にとんでもない言葉を残して帰りやがった。イリシアは顔を真っ赤にしてしばらくつつ立っていたが、すぐに気を取り直して照れ笑いを浮かべつつ、作業の続きに没頭していた。・・・どうにもペースを乱されっぱなしだ。しかしここにも悪くないと思う自分もいた。・・・複雑だ。

結局、全ての片付けが終わって落ち着いたのは、夕方六時を回った頃だった。

「ふうっ。こんなものですかねえ。でも個人的には花なんかも飾りたいなあ。」

「それはまた今度だ。もう六時だぞ。」

「あっ・・・もうそんな時間ですか？・・・えへへ、夢中になりすぎて時間の経つのも忘れてました。」

「・・・よっぽど好きなんだな、こっこの。」

「そっいつわけじゃないんですけど& a m p ; # 1 2 3 1 6 ; ; . . .
なんていうか、憧れてたんですよ、こっこのこと！」

「・・・部屋のコーデインイトか？」

「違いますよ！・・・そうだなあ、狭いながらも自分の家があつて、部屋にはこう、綺麗な花とか絵画が飾つてあつてえ& a m p ; # 1 2 3 1 6 ; ;」

イリシアは妄想の中で遠い目をしている。

「それでほんとは犬とか飼つたりして& a m p ; # 1 2 3 1 6 ; ; . . .
・それで& a m p ; # 1 2 3 1 6 ; ; . . . その・・・と、隣には・・・。
」

急にイリシアが口籠る。

「ん？」

「・・・え、えと、その& a m p ; # 1 2 3 1 6 ; ; あ、あははは！な、何でもないですつ！そうだ！お腹空きませんか！？あたし、何か作りますねっ！！」

・・・突然そっぽを向いて冷蔵庫を漁り出すイリシア。
・・・なんだ？いきなり。・・・まあいいか。

確かに腹も減っている。俺は夕飯の準備を شدしたイリシアを横目に見ながら、買い溜めしてきたカートンの煙草のパッケージを開けて、一個取り出すと残りをキャビンにしまふ。キャビンの中を見て、思い出す。

・・・そういえば銃の手入れを忘れていたな。弾丸は確か・・・。
俺はキャビンの引き出しの奥からパラペラム弾の詰まった箱を取り出す。

拳銃の安全装置を確認し、カートリッジを引き抜く。中に残ってい

た弾丸は十発。一発はアトウラの時。もう一発は例のチンピラを脅した時の一発だ。

俺は銃身を確認する。・・・煤が多少残ってはいたが、フレームの歪み等はないようだ。粗悪なものであれば、一、二発撃つだけでフレームに歪みが出たり、下手をすると弾が入ってしまったりする場合もある。俺は軽く煤を落とすと、弾丸を一度全部抜いてから再度入れ直す。万が一のことも考えて、今度は一発だけにした。残りは外出する前に詰める。そうすることで、もしもこいつを身につけていない時に奪われた場合、相手の弾数を把握すると同時に最小限の被害に抑えられるからだ。・・・もつとも、今敵襲があつたとして、逆に一発だけの弾丸で太刀打ちしなければならなくなるが。少なくとも、その心配は今のところないだろう。もしもそんな事態であれば、今日一日外に出てる間になんらかのリアクションがあつて当然だからだ。

ただ、若干の心配が残るのはこの駄の元の主だ。・・・部屋の中には、この駄の主の身元を明かすような類のものは何も無かった。そう、免許証などは勿論、通帳や保険証、請求書の類など、一切の記録が一つ残らず『無い』のである。・・・何故そうまでする必要があつたのか。考えられるのは身元が割れては困る職業・・・つまりは、CIAやその類などの特殊な任務を持った公的機関の一兵。もう一つはテロリストや国家犯罪者の一兵のほうだが・・・どちらにしても、マークされている気配や殺気を微塵も感じない所を見ると、どうやらやはり死んでいることになっていてらしい。事実、確かにこの駄の主は『死んでいる』に違いないのだが。やはり、記憶を取り戻さない限り、身の安全の保証はないらしい。問題は、それにイリシアを巻き込んでしまうことなのだが・・・。

「ご飯できましたよ& a m p ; # 1 2 3 1 6 : !」

その時、キッチンに立っていたイリシアが陽気な声で夕飯の完成を

告げる。

「……？どうしたんです？難しい顔をして……。」

「……いや、なんでもない。」

当の本人は呑気なもんだ。……まあ、どちらにしてもなるように
しかならないだろう。

兎に角は、もう一度『テストロッサ』に行ってみよう。手掛りはや
はりアトウラのみだ。これからの予定を立てつつ、俺はイリシアが
用意してくれた食事を楽しむことにした。

第十八幕 審判

- 18 -

イリシアが作ってくれた夕食を平らげ、俺は煙草に火を点ける。
家事が得意だと言っただけあって、簡単な料理だが味はなかなかだ。

「・・・えと・・・お口に合いました・・・？」

イリシアが不安そうに尋ねてくる。

「ああ、美味かった。」

「よかったあ！・・・正直言うと不安だったんです、兄さん、黙々と食べてるから。あ、あたし片付けてしまいますね。」

そっとうとイリシアはニコニコと上機嫌でキッチンへ行く。

イリシアの後姿を横目で見ながら、俺は時計を見る。

・・・時刻は八時半。まだテストロッサへ向かう時間はあるだろう。
俺は、イリシアに外出する旨を伝える。

「えっ！？ちょ、ちょっと待ってくださいあたしもすぐ。」

「いや、もう時間が遅い。お前は留守番を頼む。あの街は少々治安が悪い。こんな時間に女連れで行くには危険だ。」

「で・・・でも・・・。」

イリシアは不安そうに俺を見ている。

「心配するな。そんなに遅くはならんさ。遅くなりそうなら先に寝
といてくれ。」

「……はい……。」

玄関で見送るイリシアを後に、俺はアパートを出る。

二回目のテストロッサに着くには、それほど時間は掛からなかった。
寂れた雰囲気、木製のぼろぼろの看板。古びれた扉を開けると、そ
こはやはり暗闇だった。扉を閉めると、暗闇の中に堕ちたような感
覚。二度目ではあったが、やはり慣れるものではない。
暗闇の中、声が響く。

「やあ、よく来たね。待っていたよ。」

アトゥラの声が響いた瞬間、辺りが明るくなる。蝋燭に火が点いた
のだ。

奥のテーブルの前に、アトゥラは居た。

「今日はどうしたんだい？彼女のこと？それとも、君のことかな？」

「両方だ。聞きたい。この躰の主は、どんな奴だったんだ？」

「……へえ。それは興味からかい？それとも……。」

「危険があるのなら知っておきたい。俺一人ならともかく、イリシ
アも居るんだ。大体にしてあの部屋は普通じゃない。」

「・・・確かに、彼は危険な仕事をしていた。殺人が生業つてわけじゃないみたいだけど、それに近いようなことはしていたよ。ただ、仕事の主は人探しや要人警護がほとんどだったみたいだけだね。・・・優秀だったみたいだよ。」

・・・なるほど、探偵まがいのことでもしていたのか。それなら、部屋に自分の足取りを残さないようにするのも解る。

「しかし突然、彼は死んだ。眠ったまま、それきり魂が消滅してしまった。・・・前に言ったように、原因はわからない。ただ、君たちが『死』を不幸なものとするなら、確かに彼は『不幸な死』を遂げたよ。自分の『死』を予期することなくこの世界から消滅してしまったのだからね。」

それが本当に不幸なのかどうかはわからない。苦しまずに逝けたのならある意味幸せだったと言えるかもしれない。

「実はね、今日は君に知らせなきゃいけないことがあるんだ。」

「なんだ？藪から棒に。」

アトウラは、いつになく真剣な表情で俺の顔を見据える。

「・・・それを識ることは、君に今の生活を捨てると言うことと同じだ。その代わり、君の前世のことも識ることになるだろう。逆に識らなければ、このまま、人間らしい生活をずっと続けられる。危険も無い、それは保証するよ。」

・・・識る？・・・どういうことなんだ？

「それは、二択だということか？」

「・・・そうなるね。君はどちらかを選ばなければならない。・・・どちらを選んでもかまわない。どちらも、『結果』でしかないから。僕は君に『問う』ことしかできない。二つに一つだ。・・・さあ、君はどう答える？」

生活を捨てる。・・・それは即ち、全てを捨てるということか？今の生活・・・こののんびりとした毎日のことだろうか。・・・識れば、俺は危険の中に放り込まれるってことか・・・？

アトウラは、俺の顔を見据えたまま動かない。・・・『裁定者』の名の通り、最後の審判を待つ罪人の気分だ。・・・質問はこれ以上受け付けてくれそうにない。俺は、決めなくてはならない。・・・識るか、識らないか。・・・俺は・・・俺は。。。

第十九幕 空白

- 19 -

「・・・よかつたのかい？」

何時から居たのか、ナイアラが、アトゥラに尋ねる。

「・・・また君か。 彼らの選んだことさ。それに対して僕に異存はないよ。」

「しかし、彼らの力が無いとこの世界はいずれ滅んでしまうんだよ？」

「それも一つの『結果』さ。無理に仕向けたところで我らの神は、それを望まない。・・・何かの犠牲を払ったところで、神はそれをお許しにならない。『クウルトゥル』の愛は、全ての生命にこそ注がれているんだ。」

「・・・まったく、君が考えそうなことだね。やれやれ、『クウルトゥル』は何を考えて君達を造ったんだか。」

ナイアラが肩をすくめて呆れた顔をする。そして、言葉を違う方向に向けた。

「・・・君もそうは思わないかい？『アストアラト』。」

「・・・。」

声を掛けられた主は、アトウラとは対極にある　蒼く光る髪と
髭、深紅に輝く瞳を持った、深淵の主。その堂々たる面持ちは、巖
として凜々しく、また全てを威圧するかのようだ。

「・・・君も来てくれたんだ、アストアラ。」

「望むか望まざるかに関わらず、我らの神は等しく尊大である。我
がすべきは・・・我等が母、『クウルトウル』の使命を果たすこと
のみだ。・・・久しいな、アトウラ。」

アトウラがアストアラと呼んだその凜々しき緋眼の男は、アトウラ
に軽く挨拶をすると、次はナイアラのほうを向いて言葉を投げ掛け
る。

「そして『大いなる使者』、ナイアルトホテップよ。・・・
貴殿までこの場に居られるとはな。・・・『旧きものども』の機嫌
取りをされずともよろしいのか？」

アストアラが皮肉を洩らす。

「あつははは！相変わらず面白いなあ、君は。だから言ってるのに。
私はいつでも君達の味方だって。」

「・・・。」

アストアラが眼を細める。彼の深紅の瞳にも、ナイアラの真意は見
定められない。アトウラが口を挟む。

「・・・とにかく、彼らは自分たちの道を進むことを決めたんだ。
僕たちに今出来ることは、『旧きものども』の計画・・・『アトウ

モス』の覚醒を少しでも延ばすことだけ。・・・二百年、いや百年でも延ばせれば、彼等が再度転生したときにどうにかできるかもしれない。それに期待するしか他に方法は無いさ。」

「・・・それはまた一か八かな期待だねえ。」

ナイアラが肩をすくめる。

「仕方あるまい。全ては『クウルトゥル』の導き。我らはそれに従うまで。・・・貴殿こそ、こんな処で油を売っている場合では無いと思うがな。」

「あはは、そうだったね。私にはやるべきことがあった。」

ナイアラは二人に向かって手を軽く振ると、一言だけ放つ。

「・・・私は私でやらせてもらうよ。」

そう云うと、暗闇の中に姿を消す。

「・・・。」

沈黙。

彼は二つの選択肢のうち、『識らずに生きる』道を取った。それは様々な可能性のうちの一つ。誰も彼らを責めることは出来ない。やがてくる破滅への足音は、一步、また一步と近付いていた。

・・・後の彼らの世界の行く末は、誰の識る処でもない。

第二十幕 序章

- 21 -

男は言った。

「それでも・・・俺は、識らなくてはならない。」

裁定者である彼もまた問い直す。

「それを識ることは君を、そして彼女をも危険に陥れることになるかもしれない。・・・本当に、それでもいいのかい？」

碧眼の彼は、真っ直ぐに男のことを見つめていた。

「・・・俺は、これと同じようなことを以前も、そして何度も繰り返してきたような気がする。・・・そして答えは『YES』だ。あいつにもし危険が訪れることになるというのなら・・・。」

男は、然とした態度で彼を見据え返す。

「今度は、絶対に俺が守る！・・・もう二度と、同じことを繰り返したりはしない！・・・何故だかそう思う。・・・俺は変か？」

彼は、少し戸惑った様子の男を見つめる。そして、軽く微笑むと、答えた。

「・・・いや。何がおかしいんだい？そもそも僕は言ったよね？『君も男なら、覚悟を決めなよ』と。・・・それでいいんだ。さすが

僕が、そして大いなる母『クウルトウス』が産んだ『始まりの子』だ。……僕の眼に狂いはなかったようだね。」

彼は終始嬉しそうだった。そして、更に続ける。

「君は。そして君達は識らなくてはならない。大いなる、永きに渡り繰り返されてきた、『旧きものども』と、我等『新しき希望』との因縁。」

彼は一瞬、表情を変える。

「ルルイエの審判」の忌まわしき記憶を　　！」

突然、辺りが暗闇に沈む。次に男の眼に映ったのは、鮮明なる破壊、そして、神々しきほどの恐怖。そして、その絶対的な力のもたらした、戦慄なる破壊の全てを。

これは大いなる戦い。

そして、全ての終わりであり、『新たなる始まりの序章』であることを。

第二十一幕 始まりの子

- 21 -

紅き彼は言った。

「遙かなる遠き彼方の向こう。この世界を産み出せし万物の母『クウルトゥル』は仰った。この混沌たる世界に何の意味があるう、と。」

また、蒼き彼も告げる。

「混沌たる世界に、大いなる存在など無意味だった。時の流れも、己が存在する意味すらも消え果ててしまうほどの暗き空間。母なる『クウルトゥル』は、無に有を築こうと、魂たる、二十八の存在を造り上げた。己が力の全てを分け与えて。」

彼等は共になお詠う。

『全ての神は、力の全てを始まりの子らに注ぎ、更には我等、裁定者たる七体の、己が肉体の分身を造り賜れた。そして無に有を造り賜れたクウルトゥルは、その身を以って、この世界を造り上げられた。即ち、この世界こそ彼。この世界に生きとし生ける者全てが彼自身なのだ。』

碧き眼を持つ彼は述べる。

「だけど、『クウルトゥル』と同じ存在である彼等 『旧きものども』
は、クウルトゥルの行った『無に有を造り上げる』」

行為と、彼の凄まじい力を疎ましく思った。故に彼等は、この世界

『クウルトウル自身』 を滅ぼそうとしたのさ。」

紅き瞳を持つ彼も言った。

「それこそが、遙か何億年も以前に行われた 『ルルイエの審判』
即ち、クウルトウルを『ルルイエ』に封じ込めようとしたのだ。」

映像は、正に異形の城。物体でもなく、生物でもなく。その不可解な『モノ』は、木々や全ての生き物 魚や獣や人間 を飲み込み、肥ってゆく。

「『ルルイエ』は、この世界上にある全ての生命を喰らい尽さんとした。或る者は逃げ惑い、或る者は哭き叫び……。そして或る者は戦った。我等七体の『裁定者』。そして、選ばれし、君達と同じ『始まりの子』の魂を宿す者達。……でも、事態は遅すぎたんだ。」

緋色の彼は唇を噛み締める。

「……我等は戦った。持てる全ての力を振り絞り、『ルルイエ』を再び宙へと戻す為に。しかしそれは叶わなかったのだ。一度呼び起こしてしまった『ルルイエ』を再び宙へ戻すことは不可能。……例えば『旧きものども』の力を以ってしてもだ。」

蒼き彼は再び紡ぐ。

「我等は……。最後の手段を講じた。いや、講じざるを得なかったのだ。……神の存在を超えた、『果てしなき破壊』の前には、そ

うせざるを得なかった。」

緋色の彼も再び紡ぐ。深く唇を噛み締めながら。

「・・・多くの兄弟達が、魂達が『消滅』したよ。君達の言葉を借りるのならば、それは『死』なのだろうね。そう、彼等はそのかけがえない犠牲を払って、自らを礎とし・・・『ルルイエ』を封じ込めたんだ。南太平洋沖、南緯47度9分、西経126度43分。それこそ忌まわしき、『ルルイエ』の封印されし場所だ。」

緋色の彼 アトウラは、男に告げる。

「その忌まわしき『ルルイエ』の審判』から幾億の年月が過ぎた今

再び、『旧きものども』が動き出した。 『新たな絶望』

をその手にして 「！！」

男は、余りにも絶望的な映像と、アトウラの言葉に、絶対的な恐怖を感じていた。背中を冷たい汗が伝う。言葉を失いながらも、やつのことで彼は発する。

「・・・俺に・・・どうしろと・・・？そんなとんでもない奴らを相手に・・・何をしろと言うんだ 「！？」」

恐らく、この世に生きる者ならば誰しもが彼と同じ言葉を発していただろう。常人より腕に自信のある彼ですらである。気の弱い者ならばそれだけで発狂していたかもしれない。・・・それほど彼が見たモノは凄まじかった。

しかしアトウラは、真っ直ぐ彼の眼を見据えたまま、言い放つ。

「・・・君にしか出来ないことだよ。・・・今すぐには言わない。まだ時間はある。だけど、その時間は限りなく少ない。残り少ない時間の中で、君は見つけなくてはならない。君に宿った大いなる力
『クウルトゥルの力』をコントロールする為の術を。」

そして蒼き彼 アストアラも彼女に告げる。

「汝に秘められし力・・・その力こそが、旧きものどもに対抗できる唯一の力 『クウルトゥルの力』なのだ。」

戦慄なる恐怖の前に、彼女は氣を失いそうになりながらも必死で耐えていた。長く・・・永く繰り返されてきた過ちを、もう二度と繰り返さない為に。ただ、それだけの為に。

「まず汝は知らねばならぬ。己の力。己がすべきこと。行くがいい。・・・汝の旅立つべき場所は 。」

「『アーカム』。アメリカはマサチューセッツ州、セイレムに名を連ねる都市。・・・君達はそう呼ぶね。その地に、ミスカトニックという図書館がある。・・・まずは調べるといい。人は歴史と言う名で様々な記録をしてきた。・・・すでにこの世界ではほとんど薄れてしまった記録。だけど、君にとっては必ず役に立つモノが見つかるだろう。」

アトウラは彼に一冊の本を手渡す。

「これはなんだ・・・？」

「『記憶』さ。ただし、そのままでは君にとって何の意味もない。それは、君達が『魔本』と呼んだり『魔導書』と呼んだりするものだ。開いてご覧。」

彼は、皮で造られた分厚い表紙をめくる。

「・・・これは、白紙・・・か？」

「そう。それはそのままでは何の意味も介さない。・・・まずは『記憶』を辿るんだ。時がくれば、その魔導書、『クルトウス断章』は君にとって大きな武器となるだろう。・・・どんな力が眠っているのかは分からないけどね。」

男は、『クルトウス断章』と呼ばれたその本の背表紙を握り締める。

「その本のページを完成させることは、君の失った記憶を取り戻すことにも繋がる。どうだい？悪い話じゃないだろ？」

アトウラは、おどけて見せる。

「・・・ふん。この間の『交換条件』に比べりゃ、ずいぶん割に合わない気はするがな。」

彼の言い回しに、男も皮肉のように言い返す。

「あはは、そう言わないでよ。それでも大分サービスしてるんだよ？・・・最も、僕が出来るのはここまでだ。後は君次第。どんな結果になっても、君を責めたりしないよ。」

「・・・ふん。」

男は軽く嘲うと、言った。

「 やってやるさ。どうせ俺はやるしかないんだ。・・・この胸のわだかまり・・・俺の記憶を取り戻す為なら、なんだってな。」

そして彼等は、螺旋の淵から抜け出した。己に課せられた使命。・・・最も、彼等にとって重要だったのは、そんなものではなかったのかもしれない。しかし、歩き出した。

幾度と無く味わってきたであろう虚無感。葛藤や苛立ち、哀しみ。全てを背負って。

これは始まりだ。彼等と、そして未来への序曲。プレリユード 彼等に課せられた道は、恐らくは険しいものになるだろう。だが、それでももう、彼等が立ち止まることは無い。

第二十一幕 始まりの子（後書き）

この主人公のお話は、ここで一旦休憩です。

世界を舞台に、繰り広げられてゆく大いなる神話。

クウルトウルは一体、何の為に世界を創り上げたのか。

世界は、どうなるのだろうか。

神話に完結はありませんが、この後も、更にこれからも世界は続いて行きます。

様々な視点から、世界を守る為の戦いも続くはずだと思います。

しばらくは、「クルトウス　く碧槍の帝」にて、日本に舞台を移して更に活躍させて行きたいと思えますので、応援、よろしくお願ひします。

玄武でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8325c/>

クルトウス断章

2010年10月21日21時15分発行